

日蓮大聖人御書全集

ときどのごへんじ

土木殿御返事

きょうもんふこう こと

（経文符合の事）

新版
1298
〜
1299

ときどのごへんじ きょうもんぶごう こと

土木殿御返事（経文符合の事）

ぶんえい ねん がつ にち さい と き じ よ う に ん

文永10年（'73）7月6日 52歳 富木常忍

がもくにかん た そうら お おおたどの ふたり

鵜目二貫、給び候い了わんぬ。太田殿とそれと、二人の

みこころ

御心か。

い よ どの きりようもの そうろう ことしとど そうら お

伊予殿は器量物にて候ぞ。今年留め候い了わんぬ。

ごかんき 許 おんなげ そうろう とうせいにほんこく

御勘気ゆりぬこと、御歎き候べからず候。当世日本国、

しさい あ よし ぞん さだ かんもん そうろう

子細有るべきの由、これを存ず。定めて勘文のごとく候べ

きか。

にちれん ふしろうふじよう みようほうれんげきよう

たとい、日蓮、死生不定たりといえども、妙法蓮華経の

ごじ　るふ　うたが

でんぎようだいし　ごほんい　えんしゅう

五字の流布は疑いなきものか。伝教大師は御本意の円宗

にほん　ひろ

じよう　え　ぞんしろう

ひろ

を日本に弘めんとす。ただし、定・慧は存生にこれを弘め、

えんかい　しご

あらわ

じそう

ゆえ

いちじゅう

だいなん

円戒は死後にこれを顕す。事相たる故に一重の大難これ

あ

有るか。

ほとけ

めつごにせんにひやくにじゅうよねん

いま

じゅうりようほん

ほとけ

かんよう

仏の滅後二千二百二十余年、今に寿量品の仏と肝要の

ごじ　るふ

とうじ

かほう

ろん

おそ

五字とは流布せず。当時、果報を論ずれば、恐らくは、

でんぎよう

てんだい

こ

りゅうじゆ

てんじん

すぐ

伝教・天台にも超え、竜樹・天親にも勝れたるか。

もんりな

だいまん

す

しょうあんだいし

てんだい

文理無くんば、大慢あにこれに過ぎんや。章安大師、天台

ほ　い

てんじく

だいろん

たぐ

を褒めて云わく「天竺の大論すら、なおその類いにあらず。

しんたん にんし なん わずら かた およ こよう

真旦の人師、何ぞ労わしく語るに及ばん。これは誇耀にあ

ほっそう

とううんぬん

にちれん

らず。法相のしからしむるのみ」等云々。日蓮、またまた

りゆうじゆ

てんじんとう

たぐ

かくのごとし。竜樹・天親等すら、なおその類いにあらず

とううんぬん

こよう

ほっそう

等云々。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ。

ゆえ

てんだいだいし

にちれん

さ

い

のち

ごひやくさい

とお

故に、天台大師、日蓮を指して云わく「後の五百歳、遠く

みようどう

うるお

とううんぬん

でんぎようだいし

とうせい

こ

い

妙道に沾わん」等云々。伝教大師、当世を恋いて云わく

まつぼう

ちか

あ

とううんぬん

「末法はなはだ近きに有り」等云々。

さいわ

わ み

ひんずい

もん

幸いなるかな、我が身「しばしば擯出せられん」の文に

あ

よろこ

よろこ

当たること。悦ばしいかな、悦ばしいかな。

諸人しよにんの御返事ごへんじにこれもうを申ゆえす故いさいに、委細とは止おめ了おわんぬ。

しちがつむいか

七月六日

日蓮にちれん
花押かおう

ときどのごへんじ

土木殿御返事